ふくしま すくすくスケール

令和６年３月

福島県こども未来局子育て支援課

はじめに

子どもの健やかな育ちのためには、「遊び」は欠かせないものです。

そこで、遊びにより育つ子どもの資質や能力を示すとともに、子どもたちの育ちを促す遊びや保育環境の実践例をまとめたガイドライン、通称「ふくしますくすくスケール」を作成しました。

本スケールには、県内の保育施設で既に実践されている「遊び」の環境改善のヒントが掲載されており、本スケールを参考にすることで、より効果的な取組ができるものと考えております。

保育施設がそれぞれの実情に応じた遊びの環境、保育環境づくりを行うにあたり、ぜひ、この「ふくしますくすくスケール」を活用いただければ幸いです。

目次

子どもにとっての遊び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P1

非認知能力とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P2

育ちの土台づくり～遊びを通じて非認知能力を育む～・・・ P3

保育者・保護者・地域でともに子どもを育む環境づくり・・ P4

「遊びきる」子どもを目指して ・・・・・・・・・・・・・・ P5 ～ P7

子どもの成長と学びの記録～評価を改善につなげていくために～・・・・ P6

遊びを保障する環境構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P7

遊びの環境の改善の実践例・・・・・・・・・・・・・・・・・ P9 ～ P23

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P24

子どもにとっての遊び

遊びには、子どもの育ちを促すさまざまな要素が含まれています。

遊びたいという意欲から、自ら「遊びだす」ことで始まり、「遊びこむ」ことで試行錯誤し、友だちと議論し検証していく姿が見られます。そして、十分に「遊びこむ」ことで「遊びきる」姿につながります。「遊びきる」ことで達成感を味わい、自己充実感を得て、自信へとつながっていきます。この時期に育まれた力が小学校低学年の自覚的学びになります。

つまり、幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な「学び」になります。

遊びの理解

人的環境として、「遊びは乳幼児期にふさわしい学び」といった視点を持つことが保育者の役割であると言えます。

遊びの質

遊びの質を高めるために、保育者は子どもの内面を理解し、子どもが経験していることを的確に捉えなければなりません。

遊びの環境

幼児教育施設では、友だちと十分に遊ぶ時間と場を保障し、心ゆくまで遊びきることができる環境構成が重要です。

非認知能力とは

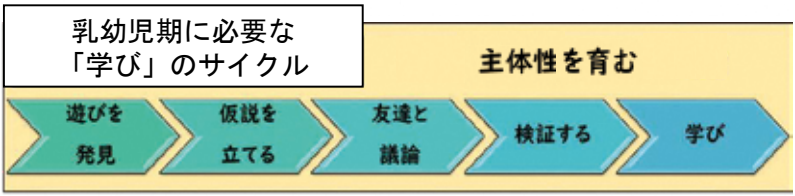
「非認知能力」（社会情動的スキル）は、目標を達成する力、他者と協働する力、自分を制御する力のことを指します。

非認知能力は身体的・精神的健康、ウェルビーイングの高さとも関係があり、この点からも非認知能力が重視されています。

実際には認知能力と非認知能力は絡み合っているもので、これらの相互作用により多様な資質・能力が育っていきます。

VUCAの時代を生きる子どもたちには非認知能力の育成の重要性が提唱されており、その認識も高まっています。

非認知能力は、誰もが一律に身に付けるものではなく、一人一人のその子らしさを大切にしながら、豊かな人生を送るうえで必要な能力を身に付けていくものです。



注）「ウェルビーイング」とは、身体的・精神的・社会的に良好な状態であることを意味します。

注）「VUCA」とは、 Volatility（変動性）・Uncertainty（不確実性）・Complexity（複雑性）・Ambiguity（曖昧性）の頭文字を取った言葉。未来の予測が難しくなる状況を意味します。

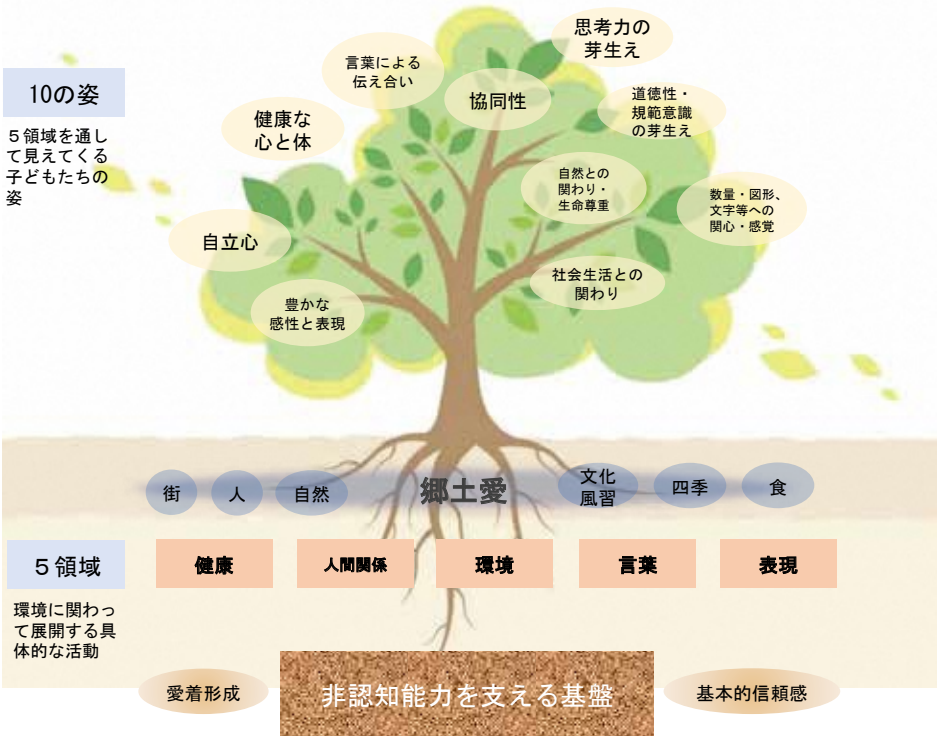
育ちの土台づくり
～遊びを通じて非認知能力を育む～

保育所保育指針などの３法令で、資質・能力の育ちを領域ごとに丁寧に捉え、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として子どもの姿を見取るものとして示されています。

具体的には、子どもたちが、園でどのような資質・能力を育み、どのような経験をし、どのような「育ちの10の姿」が見られたのか、つながりを意識してより質の高い保育をすることが重要です。併せて、子どもが自ら働きかけ学んでいけるような環境を構成していくことが幼児教育の真骨頂です。

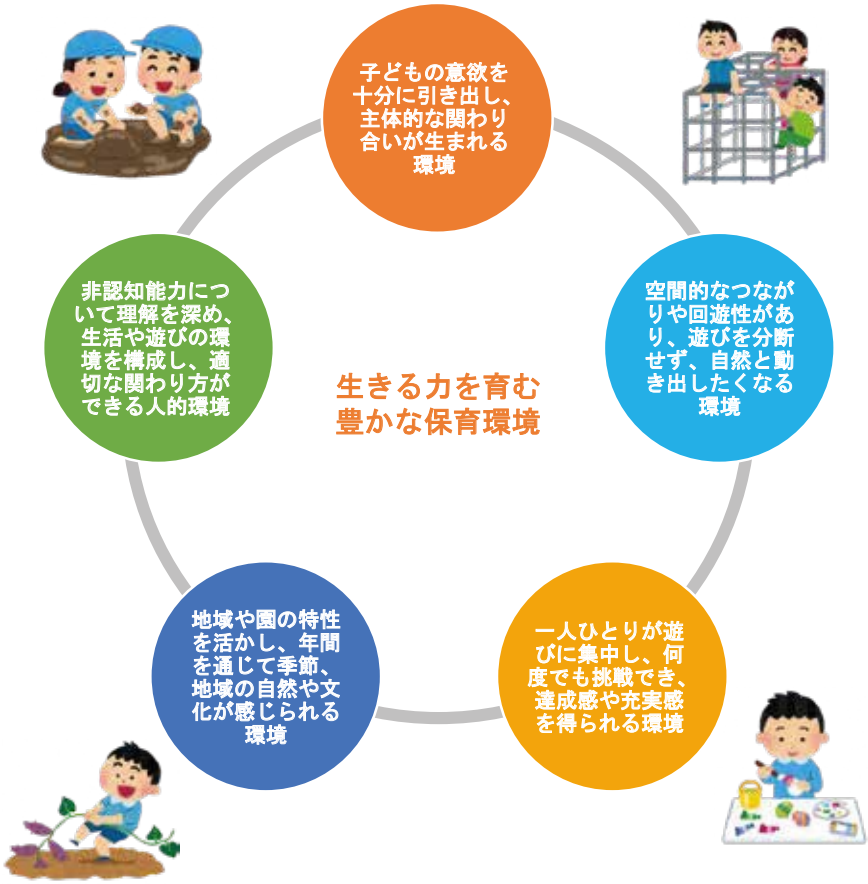
子どもの遊び力は、「育ちの土台づくり」として「成育過程で幹を出し、枝を張り葉っぱをつけていく資質・能力」のことであり、 「学び」の土台となる「根っこ」の部分になります。

多様な遊びによって自己肯定感や危機管理能力など生きる力が育まれます。また、福島の自然、文化などの地域資源を活用し、地域の方と交流を深めることが、自分の生まれた福島に愛着を持ち、郷土愛を育みます。



保育者・保護者・地域で
ともに子どもを育む環境づくり

生涯の学びの土台となる非認知能力は、乳幼児期にふさわしい体験や生活、主体的な遊びを通して育まれます。非認知能力を育む豊かな保育環境とはどのような環境か、思考力や発想力、表現力を高めるにはどのような保育者の援助や配慮が望ましいか、一緒に考えてみましょう。



「遊びきる」子どもを目指して

遊びの発展には段階があります。①「遊びだす」②「遊びこむ」③「遊びきる」のそれぞれの段階で、子どもの身体の動き、心の動き、仲間との関係がどのように変化するか観察してみましょう。2頁の乳幼児期に必要な「学び」のサイクルを参考にしましょう。①②③の繰り返しの中で遊びの幅が広がり、リスク予知能力やリスク回避能力も育まれます。子どもの発達段階と一人一人の能力を見極め、遊びの環境構成や適切な関わり方を考えてみましょう。

遊びだす	遊びこむ	遊びきる
＜興味・関心＞	＜夢中・集中＞	＜達成・満足＞

遊びを発見	仮説を立てる 友だちと議論する 検証する	学び・学びに 向かう力

子どもの成長と学びの記録～評価を改善につなげていくために～

遊びに注目し、子ども一人ひとりの成長や学びのプロセスを記述してみましょう。（下記参照）
子どもたちの活動を考察し、環境の再構成や子どもの主体性を大切にする支援につなげていきましょう。

４，５歳児活動事例　［ 木工遊びを楽しもう！］（１０月）
観点（　興味・関心　）　視点（　意欲　～おもしろそうだな～）

【遊びの経過】
木工コーナーを室内からテラスに移動し材料も増え、子どもたちがいつでも遊べない環境にしていた。台車が３台ありそれを使って何か作ってもいいよと言うと、作ってみたい！という意欲につながり活動が始まった。

→

【ねらい】
友達と一緒に試行錯誤をしながら、物を作る楽しさを味わう。

【評価】
・目的に向かって主体的に木工遊びに取り組んでいる。
・友達と協力しながら試行錯誤を繰り返し、物を作る楽しさを味わっている。

【○幼児の活動　★環境の構成　■保育者の援助】

★かなづち、のこぎり、釘をいつでも使えるように準備する。
大きさや長さや形の違った木片や丸太を豊富に準備しておく。台車、マットを使う。

○木片や丸太を探し台車につける。

○台車をつなげる。
○いろいろな部品をつける。
○のこぎりで切る。

■　子どもの発想を大切にし、自分で工夫し頑張っている姿を傍で見守り、しばらく余計な声をかけないようにする。
■　遊びのタイミングを見ながら「これからどうなるのかな？」「こんなものもあるよ。」など声をかけイメージを膨らませたり気持ちを高めていったり、もっとおもしろくしたいという意欲につなげていったりする。

■　釘が板を突き抜けた時、また届かなかった時、どうしてそうなってしまったのか原因を一緒に考え、学びにつなげていく。

■　のこぎりを切りにくそうにしている時は、ある程度まで手伝い、最後は子どもが自分の力でやり遂げたという達成感を味合わせていく。

【考察】
台車を使うことで１つずつ車を作って乗って遊ぶのではないかと予想していたが、子ども達の発想は違っていて、３つをつなげて長い車を作り始めた。「ここにはイモリを乗せる場所にしよう」とか、「ここにハンドルをつけよう」とか、材料を十分に揃えていたこともありどんどんアイデアが出てきていた。釘打ちに集中する姿、友達に手伝ってもらいながら作業を進めていく姿、失敗を繰り返しながら自分で考える姿などまさに遊びが仕事になっていた。友達が周りで他の遊びを楽しんでいても、自分の活動（遊び）のイメージと見通しがしっかり頭にあり、成し遂げようとする意欲によって気持ちがぶれることなく集中できていたと感じる。

遊びを保障する環境構成

環境は最初から作り込み過ぎず、子どもたちが試行錯誤して環境を再構成できる“余地”を残しましょう。

子どもたちの遊びを保護者も体験したり、地域の人たちの協力を得たりしながら、どのような環境がよいのかをともに考え、作っていきましょう。

＜健康＞

- □ のびのびと体を動かす開けたスペースは確保されていますか　☹・・・・・☺
- □ 穏やかな活動や休憩ができる空間は確保されていますか　☹・・・・・☺
- □ 遊具の状態、子どもの遊び方や動線を観察し、適切な点検やリスク管理ができていますか　☹・・・・・☺

＜人間関係＞

- □ 子どもの主体性を育む援助ができていますか　☹・・・・・☺
- □ 子どもたちがルールを考える場所はありますか　☹・・・・・☺
- □ 友だちから刺激を受け挑戦できる環境はありますか　☹・・・・・☺
- □ 異年齢の関わり合いが生まれる環境はありますか　☹・・・・・☺
- □ ふるさとへの愛着、地域とのつながりという観点から、地域の人と交流できる場所はありますか　☹・・・・・☺

＜環境＞

- □ 園舎と園庭をつなぐ中間領域はありますか　☹・・・・・☺
- □ 築山・傾斜はありますか　☹・・・・・☺
- □ 雑草地はありますか　☹・・・・・☺
- □ 五感が活性化する多様な遊びが展開できる環境ですか　☹・・・・・☺
- □ 自然の要素（土・緑・水など）は十分にありますか　☹・・・・・☺
- □ 四季により変化を感じる場所はありますか　☹・・・・・☺
- □ 遊びの中で使える道具、材料・素材は十分にありますか　☹・・・・・☺
- □ 遊びの中で道具や材料は自由に使えますか　☹・・・・・☺
- □ 数量・文字・標識などに興味関心、感覚が養われる環境がありますか　☹・・・・・☺
- □ 情報共有やリスク管理のためにICTを活用していますか　☹・・・・・☺

＜言葉＞

- □ 子どもが伝えたい気持ちや意見に応答していますか　☹・・・・・☺
- □ 言葉に対する感覚を豊かにする多様な体験ができていますか　☹・・・・・☺
- □ 絵本や図鑑などをうまく活用できていますか　☹・・・・・☺

＜表現＞

- □ 感じたこと、考えたことを表現して楽しむ環境がありますか　☹・・・・・☺
- □ 園での生活において感性を豊かにする多様な環境がありますか　☹・・・・・☺
- □ 音、形、色、手触り、動きなどに気づいたり感じたりして楽しめる環境がありますか　☹・・・・・☺

遊ぶ権利は、コミュニティで子どもが一番初めに求めるものだ。
遊びは、本能に基づいた人生のトレーニングである。この権利をおろそかにするコミュニティは、市民の心と体にいつまでも悪影響を続けるだろう。

デイビッド・ロイド・ジョージ
（前英国首相）

私は、遊ぶこと以上に子どもに多くを与えられるものを知らない。しかも、楽しい。
遊びは、子どもの人生の質を高くするだけでなく、国の未来、そして創造的な産業界や経済を生み出すためにも重要だ。

クリス・スミス
（イングランド前文化・メディア・スポーツ省大臣）

こどもまんなかフォーラム（第６回）
一般社団法人　ＴＯＫＹＯ　ＰＬＡＹ　代表理事　嶋村仁志　資料　１９ページより

遊びの環境の改善の実践例

事例を参考に、地域や園の特色を活かして実践していきましょう。

事例１　移動式遊具・・・・・・・・・・・・・・・・P10
さまざまな素材の組み合わせで遊びが広がる園庭

事例２　大きな砂場・・・・・・・・・・・・・・・・P14
砂の可能性を追求、砂場を起点に遊びが広がる園庭

事例３　ゆるやかな芝生の築山・・・・・・・・・ P16
小さい子も大きい子もみんなが集える空間

事例４　小さなビオトープ ・・・・・・・・・・・P18
毎日園庭で生き物にふれ合える空間

事例５　大きなビオトープ ・・・・・・・・・・・P20
流れと池の水場で遊びが広がる園庭

事例６　ボルダリング遊具 ・・・・・・・・・・・P22
屋内スペースを有効活用した立体的な遊びの空間

事例１　移動式遊具

園庭が狭く、借地で自由に大きな改造ができないため、素材を活用した遊具を導入しました。子どもたちが自分で持ち運びできる丸太や長板、タイヤやコンテナを揃え、自由に組み合わせて遊びが展開できるようになりました。木製の素材は幅や長さを変えて加工、タイヤは幅や大きさが違うものにして、組み合わせに多様性が生まれるように工夫しています。さらに、コンテナやクッションなど身近にある素材を加えることで、子どもたちの遊びの幅が格段に広がりました。

【改善後】

園庭全体

3.4.5歳児

橋わたり　長板 ＋ 半丸太 ＋ タイヤ ＋ コンテナ

4歳児

バランス遊び

半丸太 ＋ 長板

3.4.5歳児

5歳児

タイヤ遊び

タイヤ ＋ バイオ
クッション

凸凹
タイヤの道

4.5歳児

落ち葉の
お風呂

タイヤの山

平坦な園庭が
凹凸になる

丸太トンネル

長板 ＋ 半丸太 ＋ コンテナ
＋ バスマット

子どもたちの遊びの変化

・挑戦する姿（自立心）
・友達との協力や合意の形成（協同性）

○　興味や関心度が高まり、自然に体を動かそう（遊ぼう）とする姿があり「やってみたい」と挑戦する姿がたくさん見られた。

○　丸太、板、タイヤ、コンテナ、バスマットを使い自分のイメージを膨らませて組み立てる姿が見られた。友達とイメージを伝え合い、相談したり協力したりする姿、折り合いを付ける姿などが多くなり関係性も深まった。（大人が想像もしないような並び方や組合せ）

○　友達と一つの物を作り上げる姿に楽しさや作り上げた喜びを感じている様子が見られた。

○　保育者の言葉掛けや関わりで、力加減を考えたり丁寧に扱ったりする姿が増えてきた。

○　自分たちで何でもやってみようとする姿が増えた。

保育者の気付き等

・子どもが楽しめる遊びについて保育者間で考える
・子どもを信じて遊びを見守る

○　子どもの遊ぶ姿を見て、子どもの発達を意識した眼差しになった。（子どもの遊ぶ姿に危険を感じることもあるが、１歳児でも「これ以上は危ない？」と自分で考えながら遊んでいるなど、体と心の動きを感じながら保育している。）

○　どんな遊びが、どういう遊び方が子どもにとって楽しめるのか、経験してほしいのかなど、保育者間で考えるようになった。（丸太、板、タイヤがあることで遊びを考えやすい。）

○　保護者に子どもの環境づくりへの興味を持っていただきたい思いから、行事の中で遊具を活用したり、古タイヤの寄付を募ったりした。これから遊具の塗装メンテナンスの手伝いも保護者に依頼する予定。今後もさまざまな形で『保護者参加型の活動』を大切にしたい。

○　『禁止の言葉を使わない』関わりを実践した。今まで『ダメなこと』『危険なこと』を探して注意・撤去していたが、制限する必要がないことで、子どもを信じて遊びを見守ることができ、心に余裕ができた。

事例２　大きな砂場

園児が数名しか入れず十分に遊べなかった砂場を、大きな八角形の砂場に改修。異年齢の子どもが一緒に遊べるようになり新たな関わり合いが生まれたり、一度に多数の子どもが遊べるようになりダイナミックな砂遊びに発展しています。棚倉産の砂を入れた深さ40cmの砂場はふかふかで、八角形の丸太枠は腰かけて互いの顔を合わせやすいつくりになっています。砂遊びのバリエーションが広がり、子どもたちが砂場で過ごす時間も大幅に増えました。

【改善後】

八角形の砂場（棚倉産の砂を使用）

子どもたちの遊びの変化

・異年齢との遊び（協同性）
・様々な形を作る
（豊かな感性と表現）

○　１歳から就学前までの子どもたちが一緒に遊んでいる。砂を器に移して黙々と一人遊びをしたり、皆で山やお城など様々な形を作ったり、砂だんごを上手に作る工夫を重ねたり、土俵に見立てて相撲を取ったり。大きな子がやっているのを見て、小さな子はその姿に憧れ、自分も挑戦してみようとする。
　それぞれが集中してて遊びこみ、刺激し合える環境になっている。

○　ふかふかの砂に座り込んだり、砂が気持ちいいのか、子どもたちは裸足になったりする。砂場を変えたことで、ここまで園児の動きや遊び方が変化するとは想像できなかった。園に関わる人全てが、改めて砂場の魅力を発見し、共感し合い、楽しめている。

保育者の気付き等

・砂場の良さを再確認
・発達段階や環境を通した遊び

○　砂場を基点として、園庭の自然環境の良さを再確認でき、砂場遊びがさらに充実するように、モノ・空間・時間などを深く考えるようになりました。

○　保育者の意識も高まっている。発達段階に合わせてどのような砂遊びが展開できるか、環境を通して子どもの育ちをどう支えていくか、専門家やNPOの研修を受け意欲的に学んで実践している。　道具などの導入だけでなく、足を洗える場所や、ホワイトサンドの室内砂場も新たに作りました。

事例３　ゆるやかな芝生の築山

小さな園庭に緩やかな勾配の小さな築山を造成。住宅街のショッピングセンターの一角にある園の周囲は自然が少なく、車通りも多く、安心して遊べる場所がありません。乳幼児も遊べるように起伏に幅をもたせて芝生を植えました。小さな子はよじ登ったり寝転んだり、大きな子は小さな子に気を配りつつ、駆け回ったり転がったり、うまく分かれて遊んでいます。冬には雪遊びのフィールドに。小さな子から大きな子までみんなの大好きな空間になっています。

【改善後】

子どもたちの遊びの変化

・体をたくさん動かす
（健康な心と体）
・自分で遊びを考える
（思考力の芽生え）

○　今までデッキやゴザ、散歩で遊ぶことが多かった乳児も、芝生やクローバーなど自然物に触れながらハイハイをしたり、探索活動をしたりとさまざまな経験をすることができた。乳児も、平坦だった園庭に築山ができたことで、登り降りをしたり、築山の上からボールや丸太を転がしてみたり、そり滑りをしたりと体をたくさん動かし、自分で遊びを考えて活動する姿を見られた。

○　築山、砂場では、異年齢の関わりも見られ、転んでる子を助けたり、手をつなぎ一緒に登ったり、年上の子の遊びを真似したり、それを優しく受け入れたりする幼児の姿も見られた。

保育者の気付き等

・環境の大切さ
・話し合いながらの保育

○　環境改善後の子どもたちの姿を見て、環境によって子どもたちの反応や遊び方、育ちが変わっていくことを実感し、いかに環境が大切かということを再認識することができた。築山、芝生などができたから終わりではなく、そこから見えた子どもの姿から、保育者の関わり方や援助の仕方、子どもの成長、今後どうしていけば良いのかなど、話し合いをしながら保育を進めていくことができるようになってきました。

○　新たな環境から見えた子どもの姿から、「こうなってほしい」「こうしたい」という思いも強くなり、そのためにはどのような取組みが必要か、考えるきっかけになりました。

事例４　小さなビオトープ

自然に恵まれた立地でありながらも、園庭にも生き物にふれあえる環境が欲しいと小さなビオトープを造成。保育者の目が届きやすく、園児が毎日観察できる場所にプラスチック製の容器を３つ連結して設置、井戸からくみ上げた水に水草を入れてオタマジャクシやフナ、ザリガニを放ちました。ビオトープの周りには園児と保護者が協力してクローバーの種をまきました。自然や生き物の変化を観察し、気づきや発見があり、命の尊さを感じ取る経験を積み重ね、子どもたちの豊かな感性を育んでいます。３つのビオトープの水位を変えるために園児が海岸で石を集めてきて入れています。

【改善後】

子どもたちの遊びの変化

・生き物への興味関心
（自然との関わり・生命尊重）

○　生き物（フナ・メダカ・オタマジャクシ）にこれまで以上に興味を持ち、観察力が増した。オタマジャクシの変態の様子を日々観察することができ、オタマジャクシから蛙になるまでの過程が良く分かり、更に興味関心が深まった。

○　冬になると氷がはったので、水が氷になる不思議、また氷が水になる不思議に気付くことができた。

○　動かなくなっていくフナの変化を気遣ったり、死んでしまったフナをいたむ気持ちが子どもの会話から聞かれたりした。

保育者の気付き等

・自然環境の意識
・地域との関わり（郷土愛）

○　オタマジャクシの変態に伴い、子どもの質問に答えられない保育者が、そのことについて自ら調べて、子どもに回答している姿から、保育者の自然環境に対する意識の高まりを感じた。

○　保護者がお迎えにきたときなど、親子で、ビオトープの中のフナやメダカやオタマジャクシが蛙になった様子などを見ている姿が見られ、ほのぼのとした関わりを感じた。

○　地域の方が、ビオトープに放すフナやオタマジャクシの卵を取ってきてくれ、地域の人との交流が増えた。

事例５　大きなビオトープ

新たに取得した土地に池と流れを配した水場を造成。既存の園庭では、ビオトープの造成に先立ち井戸を設置し、子どもたちが存分に水を使えるようになりました。水道水の使い過ぎという保育者の懸念はなくなり、水を媒介に砂場や泥場での遊びの幅が一気に広がりました。また、本格的な造成工事を経て完成したビオトープは、水遊びのみならず自然や生き物にふれ合えるフィールドとなり、子どもたちは一年を通して水辺の環境を楽しんでいます。

【改善後】

子どもたちの遊びの変化

・ダイナミックに遊ぶ
（健康な心と体）
・考えながら遊ぶ
（思考力の芽生え）

○　自然が今まで以上に子どもたちの身近になったことで、「不思議に感じる」「調べる」「考える」「友達と話し合う」「感じたことを表現する」という経験を積み重ねることができるようになりました。

○　今まで以上に遊びの環境が充実した。池に注いでいる小川や池で遊ぶことで、ダイナミックに遊ぶ姿や、考えながら遊ぶ姿を多く見ることができるようになりました。
　見つけた生き物の種類も増えたことで子どもたちの知識も広がりました。

○　生き物が豊富な環境になった。今までいなかった生き物を発見し、興奮する子や、虫カゴ持参で登園する子も見られるようになりました。

保育者の気付き等

・園庭を通した地域との関わり
（郷土愛）

○　園庭が地域の憩いの場、交流の場となるよう、長期的に取り組んでいきたい。

○　保育者が何も言わなくても、大きい子が小さい子を思いやっている。子ども達はやりたいことに挑戦し、保育者はそれを見守るようになりました。事故も起きていない。

○　図鑑や本を見て感じるだけでなく、実際に体験できる環境があることは、「保育の質」の向上につながるのではないか。

事例６　ボルダリング遊具

園庭がない園で、限られた屋内スペースにボルダリング遊具を設置。屋内でも子どもたちができるだけ体を動かせるような空間が欲しいという保育者の願いを反映しました。遊具に取り付けたロープは、掴む、またがって踏ん張る、バランスを取るなどの動きが誘発され、音階ベルは達成感を味わえます。三層構造にしたロフトは、下層のヒノキのたまごプールと上層の隠れ家的な空間をはしごやロープで移動できます。複数の動線を巧みに配し、立体的に遊べる空間になりました。

【改善前】

【改善後】

子どもたちの遊びの変化

・何度も挑戦する（自立心）
・一人で上り下りができる（健康な心と体）

○　ボルダリングやロフトを見てとても喜び、何度も挑戦し上まで登ったり、自分よりも月齢の小さい子に教えたりと楽しんでくれています。

○　ほとんどの2歳児が、ロフトを一人で上り下りできるようになりました。

○　天候が悪い日も、鉄棒などの運動ツールを使わずに、月齢問わず、遊びの中から筋力を高めることができるようになりました。

保育者の気付き等

・自分たちの空間に対する大切さを育む（園への愛着）

○　発達に応じて、「この子はボルダリングをトラバースみたいにできるな」、「ロープ登りでボルダリングにいけるな」、など区切りをつけて、見極めて促していくようにしたい。

○　たまごプールを子どもたちと一緒に掃除をすることで、自分たちの空間に対する大切さも育みたい。

○　慣れてきた頃が怪我しやすいこともあるので、しっかり見守り・声掛けを行い、危険のないようにしたい。

おわりに

自然災害が増え、変化が激しく、予測不可能な状況下にあって、お子さんを取り巻く環境から「自然」が遠のいています。お子さんの成育には多様な体験が必要で、それは「生きる力」の原点となり、将来の「学び」の「土台づくり」となります。「遊び」は心身の発達の「根っこづくり」つまり「知性の発達」に重要な役割となるのです。「根っこ」が無ければ土壌の中の栄養分を吸収することができません。根っこがあって幹が育ち、さらに枝をつけて、それぞれのお子さんの個性である「葉っぱ」をつけていきます。

現代のお子さんには「自然が足りない」と言われていますが、「サプリメント」で自然体験を与えることはできません。遊びは、運動能力の育みに限らず、敏捷性やバランス感覚、さらに危険察知や危機回避能力を育みます。園庭の環境改善により四季の変化や命の循環に気づき・共感し、お子さん同士で共鳴し合い、園舎内での絵本や大人の会話に耳をそばだてて「物語」を生み出しています。小さなパンフレットから福島県内のお子さんの育ちへの「共創の輪」が広がることを期待しています。

（公益社団法人）こども環境学会理事　小澤　紀美子

※詳細はＨＰをご覧ください。

こども環境学会のＨＰにて紹介しております。
専門家のアドバイスも掲載しております。

詳しくは
こちら

https://kodomo-fukushima.org/

福島県こども未来局子育て支援課

〒960-8670　福島県福島市杉妻町２番１６号

ＴＥＬ　０２４－５２１－７１７４

E-mail　kosodate@pref.fukushima.lg.jp

https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/21035b/

この事業は、国内外からお寄せいただいた寄付金をもとに造成された
「福島県東日本大震災子ども支援基金」により実施しています。